

2015 年度大学院キャリアパス形成支援のためのアンケート調査（要約版）

【調査の概要】

調査方法	WEB サイト
調査対象	全大学院生
調査目的	在学院生の実態や分析状況を大学院生にフィードバックする（大学院キャリアパス推進室HP公開）。 2016 年度第 4 期大学院キャリアパス支援制度構築の基礎データとして活用する
調査実施期間	2015 年 9 月 15 日(火)～2015 年 11 月 15 日(日)
回答数(回答率)	324 名(11.5%) ※2014 年度 307 名(11.2%)、2013 年度 169 名(5.7%)
調査内容	(1)研究活動に対するモチベーション (2)経済状況と奨学金の認知度 (3)キャリア観

() 内の数値は昨年度値

① 1 週間の生活実態（参照：図表 1 - 1～図表 1 - 3）

- 「大学滞在時間」、「研究室利用時間」、「研究・学習時間」は、文系より理系、前期課程より後期課程の方が時間数が多い。また、昨年度と比較して 1 時間～3.5 時間、時間数が増えている。

② 研究会の参加状況および研究会活動支援制度の利用状況（参照：図表 1 - 6、図表 2 - 1 6、図表 2 - 2 2）

- 研究会への参加率は 55.2%(53.4%)であり、大学院生の半数以上が参加している。特に、後期課程の参加率が高く、78.0%(74.0%)の参加率である。
- 前期課程 47.3%(35.0%)、後期課程 41.0%(41.6%)の大学院生が研究会活動支援制度の存在は知っているが申請したことがない状況である。利用状況も前期課程 7.1%(6.5%)、後期課程 21.7%(15.6%)と非常に低い。支援制度をもっと活用してもらえるよう教員、大学院生および研究科事務室職員に広報する必要がある。

③ 研究活動等をともに進めていく仲間の存在（参照：図表 1 - 8）

- 約 80%の大学院生に様々な仲間がいるものの、進路のことで相談できる仲間は少ない。特に、後期課程では、文系 44.8%(55.2%)、理系 52.0%(52.6%)の院生に進路のことで相談できる仲間がいない。進路について相談できる仲間を作る支援も必要である（2016 年度より究論館において交流企画を定期的に開催予定）。

④ 研究業績の必要数(総必要数/全回答者数)および実績数(総実績数/全回答者数)（参照：図表 1 - 1 4）

- 院生全体が国内学会発表（口頭発表）の研究業績をあげる必要があると感じているが、前期課程では実績数 0.57(0.50)と実績を残せていない。後期課程では実績数 1.28(1.38)と実績を残すことができている。
- 文系は前期・後期とも、必要と感じている業績をあげるが出来ていない。一方、理系では特に

後期課程で国内の学会発表(口頭発表)で必要と感じている以上の業績をあげることができている。

⑤ 大学院生の収入状況(参照: 図表2-1)

- ・ 大学院生全体の月額平均収入は、118,125円(138,353円)であり、昨年度より約20,000円収入が減少している。
- ・ 昨年度は、後期課程の文系192,421円と理系110,368円では収入に約2倍もの差が見られたが、本年度は、課程、分野による収入の差は見られなかった。
- ・ 前期課程と後期課程理系の収入の内訳については約50%が奨学金を占めており、大学院生にとって貴重な財源であることがわかる。
- ・ 経済状況における前年度比較について、昨年度回答と比較すると「前年度よりよくなった」と回答した割合が増えている。

⑥ 研究助成制度の認知度・利用度(参照: 図表2-11、図表2-17)

(1) 前期課程対象

- ・ 「国内・国外学会補助制度」の認知度は71.4%(73.5%)であるにも関わらず、利用度は20.3%(25.2%)である。知っているが利用したことがない大学院生が44.4%(42.2%)も存在している。
- ・ 「国内・国外学会補助制度」以外の補助制度の認知度は約50%。認知度の向上が課題である。

(2) 後期課程対象

- ・ 前期課程同様「国内・国外学会補助制度」の認知度は79.6%(79.2%)であるにも関わらず、利用度は39.8%(50.6%)である。前期課程よりは利用されているが、知っているが利用したことがない大学院生が31.3%(26.0%)もいる。
- ・ 「国内・国外学会補助制度」以外の補助制度の認知度については約60%であり、前期課程同様、認知度の向上が課題である。

⑦ 希望する進路先(参照: 図表3-1)

- ・ 理系の希望進路先について、前期課程では83.0%(89.8%)の大学院生が「民間企業(開発・技術・エンジニア)」を希望している。後期課程では「民間企業(開発・技術・エンジニア)52.0%(57.9%)と「教育研究機関研究者(大学、研究所等)80.0%(68.4%)」に二極化している。
- ・ 文系の希望進路先について、前期課程では進路先の偏りは見られないが、後期課程では81.0%(75.9%)が「教育研究機関研究者(大学、研究所等)」を希望している。

⑧ 進路先を選択する基準(参照: 図表3-4)

- ・ 80%以上の大学院生が重視する項目は「専門性を生かせる」「業種・事業内容」「雰囲気・イメージ」「将来性」「給与、福利厚生への待遇」である。「親・大学の推薦」については42.0%(42.7%)であり、項目の中では最も低いものの、考慮している院生も一定存在する。